

高品質・安定生産に向け、中耕・培土や排水対策、  
雑草対策を徹底しましょう。



## 1 排水対策の徹底と、干ばつ対策の実施について

### (1) 排水対策

- まとまった降雨等による湿害回避のため、中耕・培土後は、地表水が1日以内に排水されるように、畝間の溝を周囲の溝と連結しましょう。また、排水がスムーズになるよう、溝が土塊でふさがれていないかなど点検・整備を行きましょう。
- 大雨のあと、ほ場に水が停滞している場合は、河川の安全を確認した上で、排水路・ほ場内排水溝の点検・整備を行い、速やかに排水させましょう。

### (2) 干ばつ対策

- 暗渠が設置されているほ場では、まとまった降雨で湿害になる場合や地下水位が高く湿害が発生しやすい場合を除き、暗渠を閉め、土壤水分が低下しすぎないように管理しましょう。
- また、団地の代表的なほ場に地下水位を目視で確認できる縦穴を設置し、ほ場の地下水位を観察しましょう。地下水位が60~80cm以下に下がる場合は、かん水等を行きましょう。



### (3) かん水のポイント

- 実施時期：開花期以降の1ヶ月間（7月下旬～8月下旬）
- かん水の実施目安：下表の環境条件とほ場条件にすべて当てはまる場合

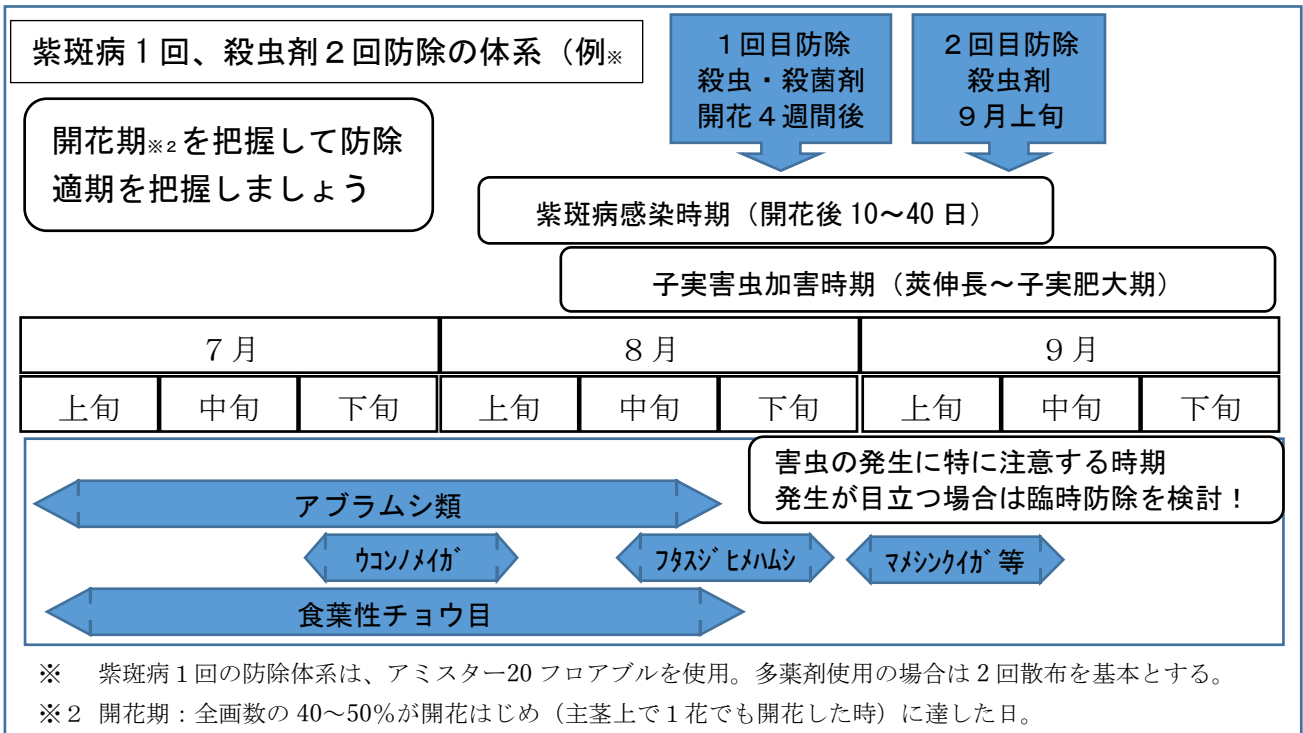
かん水が必要な環境条件	かん水できるほ場条件
①株の一番上の葉が日中半分以上直立している。	①周囲明渠等の排水対策がきちんと施工されている。
②条間の土が白く乾いている。	②排水が良好であり、速やかに地表水が排除できる。
③上記①②の条件下でさらに晴天が3日以上続く見込み。	

- 注意点
  - ・排水口・暗渠栓を閉じて、ほ場全体に水が行き渡るまでかん水を行い、ほ場全体に水が回ったら速やかに排水しましょう。
  - ・1回当たりの水量は地下かんがいでは50~60mm、地表かんがいはこれよりやや多くかん水しましょう。
  - ・大きい区画では一度に1筆のほ場をかん水すると、水口側で湿害を起こすことがあるため、数日かけてかん水しましょう。

## 2 病虫害防除

### 主要病虫害の体系防除

ほ場段階で対象となる主要な病虫害は、紫斑病、ウコンノメイガ、フタスジヒメハムシ及びマメシクイガ。これらを対象に体系防除を行きましょう。



商品名	対象病虫害	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	散布液量	アゾキシストロビンを含む農薬の総使用回数
アミスター20フロアブル	紫斑病	2000~3000 倍	散布	収穫 7 日前まで	2 回以内	100 ~ 300 ㍓/10a	2 回以内
		16~24 倍	無人ヘリコプターによる散布			800 ミリリットル/10a	

#### 【農薬使用の注意事項】

- ①「農薬使用者」の責任を理解し、「使用者」が責任を持って使用してください。
- ②「農薬のラベル」に記載された「適用作物」「使用量・濃度」「使用時期」「総使用回数」を確認し、「農薬使用基準」を遵守して使用してください。
- ③この資料は令和元年 7 月 1 日現在の登録状況に基づき作成しています。登録内容は変更される場合があるので、「最新の登録状況」や「農薬のラベル」を必ず確認し使用してください。

### 「里のほほえみ」で発生しやすい「ダイズ葉焼病」に注意しましょう!

#### ○ 発生生態

葉焼病は、種子伝染するほか、被害茎葉で越冬し、葉から発病します。

はじめは、葉に淡緑~紅褐色の小さな斑点が現れ、次第に拡大して周囲が淡黄色の褐色~黒褐色の不整形の病斑になります。

激しく発病すると、葉全体が焼けたようになり、落葉・枯死に至る場合もあり、減収や小粒化につながります。



#### ○ 防除対応

- ・ 種子伝染するため、採種ほ産の種子を使用する。
- ・ 被害茎葉が伝染源となるため、多発ほ場は連作を避ける。
- ・ 生育期間中、早期から発生し、多発生が予想される場合は薬剤防除を実施する。